労働、土地、そして国家の政策手段

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

対立から三者協調主義へ：労使関係の変化

ウィンセミウス（Winsemius）が懸念した労使関係の問題には、深い根がありました。1955年、シンガポールでは275件のストライキが発生し、5万7,000人の労働者が参加して、94万6,000人日の労働損失が生じました。人民行動党（PAP）政府は労使仲裁裁判所（Industrial Arbitration Court）を創設しました。同裁判所は労使関係令（Industrial Relations Ordinance）に基づき1960年9月15日に業務を開始し、団体交渉の促進と紛争の解決を目的としていました。しかし、この裁判所によって対立が終わったわけではありません。リー・シェンロン（Lee Hsien Loong）は、EDBが活動を始めた1961年の損失を41万5,000人日としており、この数字はその後一度も上回られていません。ストゥーリンガ（Stoelinga）は同じ年について、ストライキ116件、労働損失41万1,000人日という数字を挙げています。[1]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

決定的な転換は政治の領域で起こりました。本部第II章で述べたPAPの分裂と左派指導者の逮捕の後、全国労働組合会議（National Trades Union Congress、NTUC）が政府と密接に連携する支配的な労働団体となりました。1965年、NTUCと政府は「産業発展憲章（Charter for Industrial Progress）」と「生産性行動規範（Productivity Code of Practice）」に署名しました。[2] 労働組合は、組合員の福祉が経済成長と投資にかかっていることを受け入れました。政府はその見返りとして、NTUCに政策への関与と、労働者のための協同組合事業における役割を与えました。

雇用法と1968年労使関係（改正）法

1968年、議会は労使関係令を改正するとともに雇用法（Employment Act）を制定し、同法は1968年8月15日に施行されました。[3][4] 政治学者のギャリー・ロダン（Garry Rodan）は、雇用法による主な変更点を次のように要約しています。週当たりの標準労働時間は39時間から44時間に延長され、祝日は年15日から11日に削減され、休日と病気休暇も削減されました。勤続10年未満の労働者の年次有給休暇は7日に制限されました。整理解雇手当は3年以上の継続勤務の後にのみ適用されることになり、賞与や恩恵的給付も大幅に制限されました。[5] 労使関係法の改正により、昇進、配置転換、解雇、整理解雇などの事項は団体交渉の対象から外され、経営側の専権事項とされました。1960年労使関係法（Industrial Relations Act 1960）の第18条第2項は、現在でも、労働組合が労働協約の提案にこうした事項を含めることを禁じています。[6]

労働組合はこの立法を支持しました。リー・シェンロンは後に、雇用法が「旧来の労働法の硬直性を一掃した」と説明しています。同法は使用者に採用と解雇の自由を与える一方で、経済成長を促し、その結果として雇用の安定を高めたというのです。争議行為はほぼ姿を消しました。1968年に記録されたストライキは4件、労働損失は1万9,959人日で、1969年には1件

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

もありませんでした。労使仲裁裁判所は、1960年代後半の産業平和を、自らの活動、1968年の立法、そして政府の後押しによる労使間の協調関係によるものとしています。[7]

この平和の代償も記しておくべきでしょう。労働者は1950年代に勝ち取った諸権利を手放し、労働組合の独立性は大きく制約されました。ロダンをはじめとする批判者は、この時期を、国家が外国資本の利益のために労働者を統制した時代と評しています。これに対し支持者は、急速な雇用拡大によって10年以内に実質所得が上昇したと反論します。いずれの見方も、投資家にとっての結果については一致しています。ストライキがまれで、賃金コストを予測できる労働市場が生まれたということです。

全国賃金評議会

完全雇用は新たな問題を生みました。失業率が低下するにつれ、政府は、分散的な団体交渉が賃金の急騰を招き、投資を遠ざけることを懸念しました。1971年にホン・スイセン（Hon Sui Sen）財務大臣が三者協議の場について労使の指導者に打診した後、1972年2月7日に全国賃金評議会（National Wages Council、NWC）が設立されました。労働側、経営側、政府がそれぞれ3名の代表を任命し、独立した議長がこれを率いました。[8] 初代議長を務めた経済学者リム・チョンヤー（Lim Chong Yah）は2001年までその職にあり、このアイデアはウィンセミウスによるものだとしています。ストゥーリンガは、その起源をオランダの社会経済評議会（Social and Economic Council）にたどっています。[9]

評議会は賃上げに関する年次ガイドラインを公表します。ガイドラインに法的拘束力はありませんが、公共部門と労働組合のある部門の大半はこれに従っています。1979年10月に労働省が実施した調査によると、団体交渉の対象となる被用者48万9,000人、すなわち労働力の83%が、同年の勧告から直接の恩恵を受けました。1979年には、評議会はその影響力を逆の方向に用いました。1979年から1981年にかけての大幅な賃上げによる「是正

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

的賃金政策（corrective wage policy）」は、経済を技能集約型で付加価値の高い活動へと押し上げることを狙ったものでした。[10] こうして賃金政策は産業政策の手段となったのです。

土地収用と公共住宅

土地は、2番目の希少な生産要素でした。1960年代初めの時点で、国が所有していたのはシンガポールの土地の半分に満たない面積でした。[11] 政府は、強制収用に関する法律を段階的に改めていきました。1963年、リー・クアンユー（Lee Kuan Yew）は立法議会でその原則を示しました。公費による開発のおかげで誰かが棚ぼた的な利益を得るべきではなく、また、公共目的に必要な土地の価格は、政府がその地域の開発を計画しなかった場合の価値を上回るべきではない、というものです。[12]

1964年の土地収用（第2次改正）法案（Land Acquisition (Amendment No. 2) Bill）は、独立後に1966年土地収用法（Land Acquisition Act 1966）となりました。同法は、補償の基礎として「固定（pegged）」された土地価格を導入しました。その後、価格は1973年11月30日時点または告示日時点のいずれか低い方に固定されました。基準日が繰り下げられるようになったのは1988年以降のことです。市場価格を下回る補償により、公共事業のコストは劇的に低下しました。2007年、法務大臣は、補償を制限する規定によって、HDBのニュータウン、ジュロン工業団地（Jurong Industrial Estate）、チャンギ空港、MRTを国が負担できるものになったことを認めました。同年の改正により、補償は収用日時点の市場価格に基づくものに戻されました。[13]

公共住宅は土地政策を補完するものでした。1960年2月に設立された住宅開発庁（Housing and Development Board、HDB）は、1965年までに5万4,430戸の住宅を建設しました。[14] 住宅供給によって、1959年に観察者たちに衝撃を与えたスラムが一掃され、労働者は政治的安定に利害を持つようになりました。また住宅市場は、第D部で国民貯蓄の源泉として検討する中

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

央積立基金（CPF）と結び付けられました。産業戦略の観点からみれば、収用した土地と公共住宅の組み合わせにより、工場とそこで働く労働者を、計画立案者が選んだ場所に配置できるようになったのです。

よくある誤解

シンガポールは、国家が市場に介入しなかったからこそ成功した自由放任型の経済だと語られることがよくあります。しかしEDBの歴史が示すのは別の姿です。国家が産業を選び、工業団地を建設し、土地の大半を所有し、自らの銀行を通じて事業に資金を供給し、企業ごとに免税期間を交渉し、三者構成の評議会を通じて賃金を形成しました。シンガポールが避けたのは、保護主義と、それ自体を目的とした製造業の国有化でした。市場は外国資本に開かれており、自由市場というイメージが根強いのはそのためです。とはいえ、その市場は国家によって設計され、維持されてきたものでした。

注

1. Industrial Arbitration Court, “History”（iac.gov.sg、2026年11月最終閲覧）：“In 1955, there was a high of 275 strikes, involving 57,000 workers, and a record loss of 946,000 man-days.”。Industrial Arbitration Court, “History”（前掲）：同裁判所は1960年9月15日に業務を開始。立法の目的は“the encouragement of collective bargaining with a view to the free negotiation of collective agreements”。Speech by BG Lee Hsien Loong, 1 August 1991（前掲）、5頁：“In 1961, when EDB began, 415,000 man-days were lost through strikes and street riots”。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*（前掲）、337頁（Prime Minister’s National Day Broadcast 1969を引用）。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

2. Wikipedia, “Labour movement of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：“In 1965, NTUC and the government signed a Charter for Industrial Progress and a Productivity Code of Practice.” ↩

3. Employment Act 1968、「In operation from 15 August 1968」。Singapore Statutes Onlineからlawplayer.comに転載されたもの（2026年11月最終閲覧）。 ↩

4. Industrial Relations (Amendment) Act 1968も同日に施行されたとされています。NLB Infopedia, “Industrial Relations (Amendment) Act”（SIP_2014-07-07_133856）参照。 ↩

5. Garry Rodan, *The Political Economy of Singapore’s Industrialization*、92頁。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*（前掲）、337頁における引用による。 ↩

6. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*（前掲）、337頁：使用者は昇進、解雇、整理解雇その他の内部変更について、より大きな責任を得た。Industrial Relations Act 1960, s. 18(2)(a)–(f)。Singapore Statutes Onlineからlawplayer.comに転載されたもの（2026年11月最終閲覧）：昇進、配置転換、欠員補充のための雇用、余剰人員または組織再編を理由とする雇用終了、解雇および復職、ならびに職務の割当て。 ↩

7. Speech by BG Lee Hsien Loong, 1 August 1991（前掲）、7頁。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*（前掲）、337頁（Prime Minister’s National Day Broadcast 1969および国立公文書館の展示*Singapore: The Story of an Economic Miracle*を引用）。Industrial Arbitration Court, “History”（前掲）：“The late 1960s saw a climate of growing industrial peace.”。 ↩

8. Kim Seah Teck Kim, “Singapore’s National Wages Council”（前掲）、52–53頁（1971年6月19日付*Straits Times*が報じたHon Sui Senの演説を引用）：“the National Wages Council (NWC) was established on 7 February, 1972. Labour, management and the Government each had three representatives in the NWC, which was chaired by an independent chairman.” ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

9. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*（前掲）、16頁および386–387頁。Lim Chong Yah, *Singapore's National Wages Council: An Insider's View*, Singapore, 2013、4頁を引用：「The man who suggested this organization is called Dr. Albert Winsemius」、「I was its nurse-maid and hand-maiden for nearly 30 years (1972-2001).」 ↩

10. Kim Seah Teck Kim, "Singapore's National Wages Council"（前掲）、53頁。1981 NWC Recommendations, 13 May 1981, para. 1.1。Kim Seah Teck Kim, "Singapore's National Wages Council"（前掲）に収録：是正的賃金政策は"recommended in 1979 as a part of the overall strategy to shift the economy to skill-intensive, middle technology and higher value-added industries and services"。 ↩

11. 国有地の割合が1960年の約44%から現在の約90%に上昇したことは、広く引用されています（例えばSock Yong Phang、およびCentre for Liveable CitiesのKhoo Teng Chye。後者は2007年について85%超としています）。 ↩

12. Tan Sook Yee, "Is There Any Pointe?" [2003] SJLS 262、264頁。Lee Kuan Yew, *Official Report, Legislative Assembly Debates*, vol. 22, 1963, cols 652–653を引用。 ↩

13. Tan Sook Yee, "Is There Any Pointe?"（前掲）、264–265頁：Land Acquisition Act 1966となった1964年法案は"introduced the method of 'pegged' land values as the basis of compensation"。その後の基準日は1973年11月30日。1988年からの基準日の段階的な繰下げ、および1995年9月27日以降に収用された土地についての1995年1月1日の基準日。Ministry of Law, Second Reading Speech on the Land Acquisition (Amendment) Bill by Deputy Prime Minister S Jayakumar, 11 April 2007, paras 2, 4 and 7（mlaw.gov.sg、2026年11月最終閲覧）。 ↩

14. Wikipedia, "Housing and Development Board"（2026年11月最終閲覧）：HDBは1960年2月に設立。1965年までに「54,430 flats had been built」。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com